

和歌山の先人たち

第22回

たけ なか ぎ すけ 竹中儀助

海外移民で花開く

昭和四年（一九二九）七月十五日、神戸港の岸壁では、多くの人々に見送られて、「博多丸」が今にも出航しようとして、その時を待っていた。

この船は、日本からブラジルに遠く移住する人たちを乗せ、六十日の航海を続け、ブラジルのサントス港に向かう移民船である。

船上には、決意を顔にみなぎらせた竹中一家の姿があった。周囲の反対を押し切ったの渡伯である。見送りの人の叫ぶ声が、港いっぱいこだますると、船はいかりを上げ、出航の合図の汽笛を長く鳴らして、静かに陸をはなれていく。船上の人と見送る人を結んだテープは、つぎつぎと切れて、浜の風に吹かれながら波の中に落ちていった。

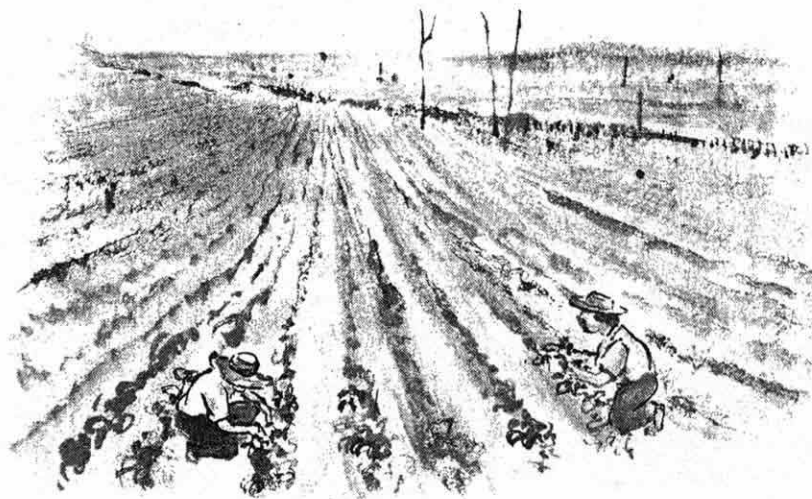
「このテープが切れると同時に、日本とはお別れだ。もう再びなつかしい日本の土をふむことは、ないかもしれない。いや、おそらくないだろう」

父は、子の手を固く握って、そうつぶやいた。この父、竹中儀助は、明治二十二年（一八八九）、西牟婁郡富田村（白浜町）の生まれで、三十八歳。青年時代には満州（中国北東部）で活躍していたが、軍隊に入営するため日本に帰国し、除隊後ブラジルへの移住を決意した。

海外移民は、明治時代にハワイから始まり、アメリカ、カナダがしだいに多くなった。ブラジルへの移民は、大正時代になってからであった。

儀助らに乗せた「博多丸」は、予定どおりサントス港に到着した。二か月におよぶ長い船旅の疲れも、新天地での活躍の夢のまえには、吹っ飛ばす思いであった。サントス港からブラジルの中心都市のサンパウロへ。そして、さらに奥地へ約四百キロの農園に、第一歩を踏出した。

そこには、一家で受け持つ三千二百本のコーヒーの木が、彼等を待ち受けていた。毎日、朝早くから夕方おそくまで、



除草やコーヒーの摘み取りなどの仕事に従事した。気候や風土の異なる海外での農業や生活は、思いのほか厳しいものであった。長男も一家の生計を助けるために、露天で花売りなどを続けた。

ある日、儀助は、「日系人社会が伸びていくために必要なのは、勤勉さとともに、

高い専門的教養だ。それが、お金よりも何よりも大切な無形の資本なのだ。おまへは、花売りをやめて、学校へ通え」といって、長男を昼は雑貨店の店員をさせながらも、夜学に通わせ、十年間かかっ

て大学まで卒業させた。

その後、儀助は、ブラジルの貿易海外興業株式会社に十五年間勤務したが、彼の誠意とまじめさが人々に感銘をあたえ、大きな信用を得て独立し、「竹中商会」を設立した。長男の正と親子で事業の発展を計り、農機具を主に、肥料、種苗、農薬などを手広くあつかい、実業家として名をあげるまでになった。とにかく何事にも研究熱心で、例えば、サンパウロ市郊外の野菜地帯は、土壌が酸性であることを知ると、日本から燐酸肥料を輸入して、現地人に肥料の効能を知らせ、病虫害に対しては、農薬と消毒法を指導するなどで信頼を得るとともに、生産向上をはかって、事業を成功させていった。

昭和二十八年七月十八日、和歌山県内を今までにない大洪水がおそい、大被害をもたらした。むざんに荒れ果てた田畑をみて、立ち上がる力もなくなった農家が多かったため、県ではこの人々を救済するためブラジルへ移民として送り出すことを計画し、ブラジル和歌山県人会長であった儀助に依頼した。

儀助は、さっそく県人移民のため、日夜奔走し、移民の人々を暖かく迎え、親身になって就業や経営指導にあたった。新しく日本から移民して農場で働いている人々に、「初めてこちらに来て、何の事情も分からぬ間は、どんな事をして、

そううまくいくものではない。言葉や、土地の様子になれることが大切だ。当分の間、黙々と自分の仕事をする事だ。君らのように、外国の人の中にいることは将来、とても役立つのだから」といって、はげました。

移民県といわれる和歌山県の功労者として、大きな足跡を残した竹中儀助は、高齢になっても、若者の指導に余念がなかったが、昭和四十年（一九六五）、七十六歳、サンパウロ市で亡くなった。昭和三十年に帰郷した際、寄付した資金を基に、竹中奨学会が設立され、後輩の進学に貢献した。

*和歌山県発行の「和歌山の先人たち」より
抜粋

